



阿部 文明
緩和ケア科科长

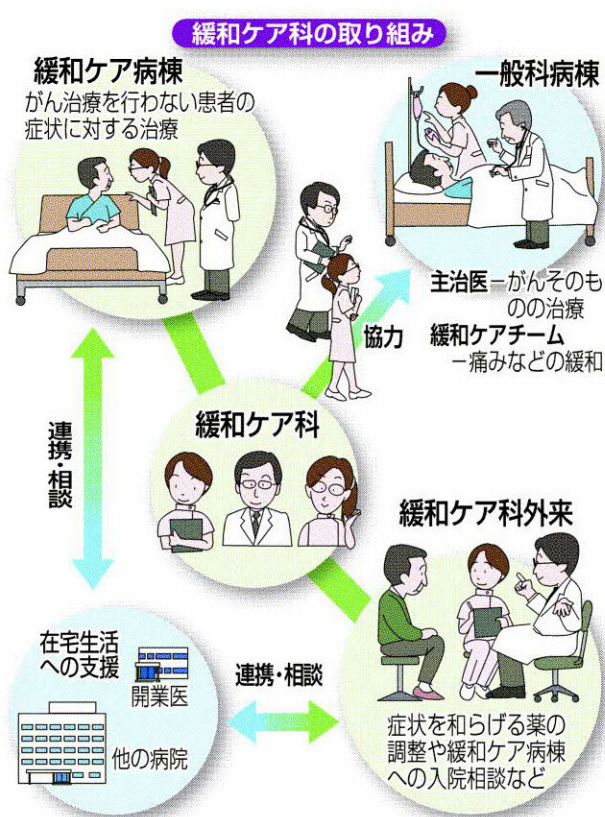
役割広がる緩和ケア

緩和ケアといえは、末期がん患者に対するケアのイメージがあったが、最近がん治療の初期段階から受けるケアとして認知されつつある。在宅患者のサポートも行うなど、緩和ケアが実践される場面は広がっている。

緩和ケアは身体的・精神的苦痛を和らげ、患者や家族ががんと共に生きる

ための治療・援助を指す。県立中央病院は2005年に緩和ケア病棟を開設、07年に「緩和ケア科」を設けた。一般科の病棟でがん治療を行う患者に対し、同科の医師や看護師らで構成する緩和ケアチームを派遣している。

一般科の主治医が、がんそのものの治療を進めながら、緩和ケアチームが



がん初期治療と併用も

がんの痛みなどの症状に対する治療に当たる。外来では、通院しながら在宅で生活するがん患者をサポート。投薬や入院の相談のほか、地域のかかりつけ医とも連携し、患者が地域社会に戻るためのサポートをしたり、かかりつけ医への技術的なアドバイスをしたりする。

一方で、緩和ケア病棟では「がんと共に生きる」という考えの下、がんそのものへの治療を行わない患者に対し、痛みなどの症状を和らげるケアをする。患者は家族や友人との時間を過ごしたり、趣味を楽しんだりする。

緩和ケア科の阿部文明科長は「自分で治療法を選ぶ、が緩和ケアの目眼。病棟でのケアやチームでのケアなど、さまざまな形でお手伝いができるので、苦しいのを我慢せずに、自分の希望をぶつけてほしい」と話している。

がんそのものの治療を行わなくても、緩和ケアの実践によって生存期間が延びたという報告もある。07年に米国で発表された論文で、肺がん患者でも緩和ケアを行った場合と、行わなかった場合の寿命を比べたところ、行った患者の寿命が約2カ月長かった。これまで分かっていなかった緩和ケアの効果として、同病院の医師も注目している。

(第2、第4金曜日に掲載します。次回は1月13日です)